

Editor's eye

・特集・

(新規)抗腫瘍薬 ～光と影～

編集担当 浅井 俊弥

皮膚科領域に限らず，進行性の悪性腫瘍に対する治療戦略は抗PD-1抗体の登場で大きな変貌を遂げた．さらに新規の治療薬が次から次へと登場し，それらを複数併用する治療法が組み立てられ，選択すべき最善の治療が刻々と変化する状況である．さらに病期によって保険適用となる治療薬が異なるなど，エビデンスとともにエキスパートオピニオンが極めて重要な領域である．

今回は皮膚科領域の悪性腫瘍に関する，最新の治療戦略を1冊にまとめることができた．メラノーマに関しては巻頭の前川の「Topics」で，術後補助療法，進行期それぞれの治療戦略が述べられている．当然ながら副作用に対するマネージメントも重要で，吉野の「治療」から多くのことを学ぶことができる．

Merkel細胞癌に対するアベルマブ，T細胞リンパ腫に対するモガリズマブ，ブレンツキシマブ ベドチンも今後症例を重ねることにより有効性，安全性が確立していく治療薬と思われる．進行期の乳房外Paget病や有棘細胞癌も治療が困難な疾患と認識しているが，日浦の「治療」や柴田，杉岡の「臨床例」で，参考となる工夫が述べられている．大学病院やがんセンター勤務医にとって現時点でとるべき治療の選択にぜひ生かしていただきたい．

なお，本号では述べられていない，治療がうまくいかなかった症例も，多くの医療機関で眠っていることだろう．当誌「声」の欄にそういった症例をあげていただき，エキスパートと一緒にディスカッションができる場となることを期待している．